

本論文は、ペルシア文学の4点の代表作『シャー・ナーメ Šāh nāme』（西暦11世紀初め）、『ガーブース・ナーメ Qābūs nāme』（同11世紀後半）、『ゴレスターン Golestān』（同13世紀）そして『モンシャアート Monša'āt』（同19世紀）に現れる敬語表現を対象としており、これらの代表作に用いられる敬語表現において、尊敬・謙遜の意を表す言語要素、個々の言語要素の現れ方、実際の用法を提供したものである。その上で4点の代表作を通してみたペルシア語の敬語表現の特徴を検証した。

イランにおいては、体系的な敬語表現を有すると考えられるアジア諸言語の言語教育・研究は未発達であり、ペルシア語は常に同じ言語語族のヨーロッパ諸言語と比較対照されてきた。しかし、複雑かつ体系的な敬語表現を有する以上、ペルシア語の敬語表現は当該語族と関係なく、同じような敬語表現を有するアジア諸言語と比較対照するのが最も妥当であると筆者は考える。アジア諸言語の内、特に日本語については敬語表現に関して綿密な研究がなされてきている。故に、ペルシア語の敬語表現を論じるには、様々な角度から研究されてきた日本語のその特徴を視野に入れるのが最も妥当と判断した。

本論文は、以下の構成から成っている。

序論 本研究の目的

第1章 問題提起

第2章 ペルシア語の敬語表現における先行研究

第3章 『シャー・ナーメ』と『ガーブース・ナーメ』に現れる敬語表現

第4章 『ゴレスターン』に現れる敬語表現

第5章 『モンシャアート』に現れる敬語表現

第6章 四つの代表作を通してみたペルシア語の敬語表現の特徴

第7章 結論

序論では、本研究の目的を明確するにあたり、敬語表現に関する日本語の文献を参照しながら、体系的な「敬語表現」の存在が、語族と関わりなく、日本語、ジャワ語、朝鮮語などいわゆるアジア諸言語のほとんどの言語の特質であることということを指摘した。それとは対照的にインド・ヨーロッパ語族のほとんどの言語には、日本語と同様の高度に体系化された敬語表現が存在していないと言われている。しかし、インド・ヨーロッパ語族の一部であるインド・イラン語派に属すヒンディーとペルシア語に日本語と同じような敬語の体系が発達させている。ところが、敬語表現に関する日本語の主要文献のいくつかには、ヒンディー語への言及を見出すことができるが、「ペルシア語」への言及を見出すことはできない。その理由は、恐らくペルシア語が高度に体系化された敬語表現を有しているという事実が、未だ日本の研究者の間に広く認知されていないことにあると推測される。また、ヒンディー語の敬語表現に関してなされた研究の一部を

引用しながら、簡潔にいかに関西語がヒンディー語の敬語表現に影響を与えたかということを描した。

第1章では、まず、ペルシア語は、日本語とよく似た豊富な敬語の体系を有する言語であるとも言えるにもかかわらず、この言語の名は敬語表現を対象とした邦文の主要文献に見出すことは困難な状況にあることを描した。これを示すため、主要な先行研究における敬語表現を持つ言語に関する言及について、いくつかの部分を選挙・紹介した。次に、ペルシア語の敬語の特徴が同じインド・ヨーロッパ語族に属す英語のそれよりも日本語の敬語に非常に似ているということを示すため、敬語表現に関する蒲谷(2007)の比較的新しい視点つまり「言材としての敬語」と「語句としての敬語」、ソシュールの「ラング」と「パロール」の区別に基づいて、日本語・英語・ペルシア語にみられる敬語の特徴を定義した。さらに、日本語の敬語表現に関する主要な分析・分類を選挙し、本論に用いられる敬語表現に関する初歩的・重要かつ必要な専門用語の定義をまとめた。

第2章において、中心的に現在まで行われてきたペルシア語の敬語表現先行研究について述べた。ペルシア語の先行研究は現在使用されるペルシア語の敬語表現・敬語行動に限定されており、その研究の数が非常に乏しい。また、現在に至るまでペルシア語の敬語に関してなされてきた若干の研究を観察しても、待遇表現や敬語表現に属す表現の呼称や性格付けすら、研究により様々である。そこで、今後の待遇表現の研究の土台を作ることを目標に初歩的なものではあるが、ペルシア語の待遇表現・敬語表現に関する新たな構造分析し、必要に応じ分析概念としての新たな呼称あるいは用語を提案した。まず、待遇表現には *bayānhā-ye raftārī* を使用した。また、待遇表現に含まれる尊大表現を *bayānhā-ye motekabberāne*、親愛表現を *bayānhā-ye samīmāne*、罵倒表現を *bayānhā-ye nāsezā*、そして敬語表現を *bayānhā-ye mo'addabāne* と命名した。さらに、敬語表現に分類される尊敬表現を *bayānhā-ye mohtaramāne*、謙遜表現を *bayānhā-ye forūtanāne*、そして婉曲表現を *bayānhā-ye qeyr-e mostaqīm-e zībā* と命名し、その構造や個々の名称の理由に関して記述した。

第3章から第5章まで本論で扱った4点の代表作を年代順に取り上げた。第3章ではまず、『シャー・ナーメ』を取り上げた。本来のペルシア的な価値観・文化的な要素を背景に記述された『シャー・ナーメ』はアラビア語語彙・イスラーム的要素を最小限にとどめており、ほとんど純粋なペルシア語語彙で執筆されている。『シャー・ナーメ』に現れる敬語の言語要素を大きく「尊敬を表す言語要素」と「謙遜を表す言語要素」の二つに分類し、作品全体に用いられる個々の言語要素の意味や使用頻度などを表で提供した。また、これらの敬語の言語要素が用いられた実例のいくつかを引用・訳した上、個々の言語要素の有様などに関して描した。『シャー・ナーメ』において、尊敬を表す言語要素は「尊敬を表す接頭語・接尾語→45種類」、「二人称・三人称代名詞を指す尊敬の言語要素→70種類」、「尊敬を表す特定の動詞→1種類」存在しており、謙遜を表す言語要素は「謙遜を表す人称代名詞→1種類」のみ存在していることがわかった。

また、個々の言語要素全ては純粋なペルシア語(以下、P)であることが明らかになった。

他方、『シャー・ナーメ』とは対照的にイスラーム的価値観を背景に多数のアラビア語語彙を含む『ガーブース・ナーメ』に用いられる敬語表現の言語要素の有様を『シャー・ナーメ』と同様な手法で分類検討した。尊敬・謙遜の意を表す言語要素の意味、使用頻度、言語要素を形成する言語などを表で提供した上、個々の敬語の言語要素が用いられた実例のいくつかを抜粋し、訳を記述した。『ガーブース・ナーメ』において、尊敬を表す言語要素は「唯一の神のみに対する尊称→11種類」、「二人称・三人称代名詞を指す尊敬の言語要素→7種類」、「尊敬を表す接尾語→12種類」存在しており、謙遜を表す言語要素は「謙遜を表す人称代名詞→2種類」存在している。さらに、個々の言語要素はP、純粋なアラビア語(以下、A)、そしてペルシア語とアラビア語の複合(以下、A+P)により形成されていることが明らかになった。また、これらの敬語の言語要素の有様は前述の作品のそれとはどのような共通点や相違点を持つかに関して指摘した。

第4章において、『ゴレスターン』に現れる敬語表現の言語要素を前述の作品と同じく大きく「尊敬を表す言語要素」と「謙遜を表す言語要素」の二つに分類し、作品全体に用いられる個々の言語要素を形成する言語、意味、使用頻度などを表の形で提供した。また、尊敬・謙遜の意を表す個々の言語要素が用いられた実例のいくつかを引用・訳をした。『ゴレスターン』において、尊敬を表す言語要素は「唯一の神のみに対する尊称→11種類」、「二人称・三人称代名詞を指す尊敬の言語要素→33種類」、「尊敬語の動詞「*farmūdan*」→1種類」、「*~kardan* (～する) の代わりに*~farmūdan* (～なさる) が用いられた複語動詞の尊敬語→13種類」、「尊敬を表す接尾語→14種類」存在しており、謙遜を表す言語要素は前述の2点の代表作より増加し、「謙遜を表す人称代名詞→3種類」、「謙遜を表す特定の動詞→4種類」となっていることがわかった。また、個々の言語要素はP、A、A+P、さらにアラビア語とペルシア語とトルコ語との複合(以下、A+P+T)によって形成されていることが明らかになった。さらに、これらの敬語の言語要素の有様は前述の代表作『シャー・ナーメ』と『ガーブース・ナーメ』のそれとはどのような共通点や相違点を有しているかなどについて指摘した。

第5章では、4番目の代表作である『モンシャアート』を扱った。この作品に用いられた敬語表現の検討手法も基本的に前述の3点の代表作と同様である。まず、作品全体に現れる敬語の言語要素を大きく「尊敬を表す言語要素」と「謙遜を表す言語要素」の二つに分類し、個々の言語要素を形成する言語、意味、使用頻度などを表の形で提供した。また、個々の敬語の言語要素が用いられた実例のいくつかを抜粋・訳をした。『モンシャアート』では、尊敬を表す言語要素の種類は前述の3点の代表作のそれより増加し、「唯一の神のみに対する尊称→4種類」、「二人称・三人称代名詞を指す尊敬の言語要素→78種類」、「尊敬を表す特定の動詞→7種類」、「*~kardan* (～する) の代わりに*~farmūdan* (～なさる) が用いられた複語動詞の尊敬語→49種類」、「尊敬を表す接尾語→57種類」存在していることがわかった。また、謙遜を表す言語要素の種類も増加し、

「謙遜を表す人称代名詞→33種類」、「謙遜を表す特定の動詞→16種類」、「謙遜を表す名詞→5種類」存在していることが明らかになった。『モンシャアート』に用いられる敬語の言語要素は P、A、A+P、及びペルシア語とトルコ語の複合(以下、P+T)、アラビア語とトルコ語の複合(以下、A+T)そして純粋なトルコ語(以下、T)により形成されており、前述の3点の代表作に比べ、個々の言語要素を形成する言語語彙も増えたことが明らかになった。第5章でさらに、これらの敬語の言語要素の有様は前述の3点の作品のそれとはどのような共通点や相違点を持つかなどに関して指摘した。

第6章において、本研究で扱った代表作を通してみたペルシア語の敬語表現の特徴に関して述べた。第3・4・5章から得たデータを図の形にし、分析・検討・比較を行った。詳細に関して、第6章を参照していただきたいが、以下に得た主旨のいくつかを述べておく。

- 1) 四つの代表作において、尊敬の意を表す言語要素のバラエティーは謙遜の意を表すそのバラエティーよりはるかに高いという共通点が存在することがわかった。さらに、『シャー・ナーメ』に純粋なペルシア語語彙により、尊敬・謙遜双方を表す言語要素が用いられていることから、ペルシア語とアラビア語との言語接触をなくしても、ペルシア語には敬語の言語要素が存在していたことが明らかになった。
- 2) 『シャー・ナーメ』に用いられた尊敬の言語要素のバラエティーが次の『ガーブース・ナーメ』と『ゴレスターン』に急減していることが明らかになった。『シャー・ナーメ』においては、本来のペルシアの伝統・文化で非常に重視されていた「王・貴族・英雄など」を対象に用いられていた尊敬の言語要素は、イスラーム的要素・アラビア語語彙を背景に記述されている『ガーブース・ナーメ』と『ゴレスターン』においては、用いられなくなったと考えられる。換言すれば、『シャー・ナーメ』は執筆の背景とする文化的要素や価値観とは全く異なる価値観が交代されており、「唯一の神」、「ムハンマドとされる預言者」や「他の一神教などの宗教的人物」を対象に敬意が払われるようになった。それと同時にアラビア語語彙の使用の重要性も増えた結果、純粋なアラビア語語彙・定型表現、アラビア語とペルシア語語彙の複合などで新たな尊敬の言語要素の使用が始まったことを指摘した。また、個々の言語要素の変化において、言語接触、文化借用、時代の経過そして「文法化」のプロセス(語彙要素が本来の語彙的意味を希薄化させ、文法的な機能語となるプロセス)が最も重要な役割を果たしていると結論づけた。
- 3) 『シャー・ナーメ』を除けば、ペルシア語において、尊敬を表す言語要素の多様性に、アラビア語語彙・定型表現、そして若干ではあるが、トルコ語語彙の借用語の補助を借りずには、これほど尊敬を表す言語要素のバラエティーが不可能であるということが明らかになった。
- 4) 4つの代表作において、謙遜を表す言語要素のバラエティーが尊敬を表す言語要素

のそれよりずっと少ないものの、特に『ガーブース・ナーメ』の執筆時代から『モンシャアート』の執筆時代まで一種の尊敬・謙遜を表す言語要素双方のバラエティーは、次第に増加してきたことが明らかになった。また、尊敬を表す言語要素と同じく、謙遜を表すその形成過程や多様性にもペルシア語とアラビア語・トルコ語との言語接触と「文法化」のプロセスの影響が大きいということが立証された。

- 5) ペルシア語の敬語表現において、尊敬を表す言語要素とは対照的に、謙遜を表す言語要素における純粋なアラビア語語彙の役割が非常に小さいことが分かった。また、恐らく謙遜を表す言語要素は最初の段階では未発達であり、アラビア語やイスラーム的要素とは無関係で、従来のペルシアの文化的要素から由来しているだろうということ指摘した。
- 6) 『シャー・ナーメ』を除いて、敬語の言語要素は『ガーブース・ナーメ』には P、A そして A+P のバラエティーが、さほど高くない。しかし、次の代表作『ゴレスターン』において、個々の言語による言語要素全てに、バラエティーが高くなることが判明された。これらの語彙のバラエティーの増加に伴って、A+P+T による敬語の言語要素も初めて現れていることが明らかになった。これに加えてさらに、トルコ語語彙の役割は次の代表作『モンシャアート』には、より大きくなることがわかった。『モンシャアート』において、トルコ語語彙及びそのコンビネーションの使用頻度やバラエティーが小さいものの、P+T、A+T、T という形で尊敬・謙遜が表されることが明らかになった。
- 7) ペルシア語の尊敬・謙遜の言語要素において、最もバラエティーが高いのが、A+P であることが明らかになった。また、ペルシア語において、尊敬・謙譲の意を表す言語要素のバラエティーに、最も少ない役割を果たしているのが、T とそのコンビネーションであることが判明された。トルコ語語彙やそのコンビネーションで形成された敬語の言語要素は『シャー・ナーメ』と『ガーブース・ナーメ』にはゼロで、『ゴレスターン』には「1種類」のみとなっている。この種の言語要素は主にトルコ系王朝だったカージャール朝時代に執筆された『モンシャアート』に現れていることが明らかになった。

最後に、結論において、各章で明らかにしてきたペルシア語の敬語表現の言語要素に関する議論をまとめた。未発達であるとも言うべきペルシア語の敬語表現に関して、本研究は、いくつかの基礎的な点を明らかにし、提供したものの、今後も数多くの研究課題が残っているままであると示唆した結果となった。本論の結果を土台に、さらに本研究で扱った時期とは異なる時期の文学作品・歴史的資料に現れる待遇表現・敬語表現の検討を続け、ペルシア語の待遇表現・敬語表現の詳細をより明らかにすることを今後の課題にしたい。